



14

地域の食を活かした小さな町

金丸弘美

食総合プロデューサー

和歌山県田辺市にある『秋津野ガルデン』は、その場にいただけで、なんだがほっとした気分になるところだ。落ち着いた空間で、やすらぎがもたらされる。レストランと宿泊施設があり、泊ることもできるし料理もいただける。今では和歌山でも憩いの場として知られるようになってきたという。

この施設のメインになっているのは小学校。昭和二十八年にできたという学校が、そのまま使われているのである。中は昔の教室が生かされていて、農業体験塾や講習室などとなっている。お客や学生を迎え入れ、近郊の農家と連携しての農業体験や料理教室などに使われている。廊下には「走ってはいけません」という表示が新しく作り直して貼ってある。

一階には厨房もある。庭をはさんでレストラン。



元小学校を使った「秋津野ガルデン」

料理は地域の農家の野菜をふんだんに使った家庭料理をメインとした地元のお母さんたちのブツフェ方式。新しくできたレストランも宿泊施設も、学校にあわせて木造で建てたのだという。

食事は校庭の芝生の上でいただくことができる。木造の建造物の雰囲気心がなごませてくれるのだろう。ここで同窓会もよく開かれるそうだが、とても人気なのだという。

この学校のレストラン、取り壊されそうになったのを地元の住民の有志の人たちがお金を出し合って会社をつくり運営にあたっている。

そのほとんど同じ仲間が、やはり出資して生まれたのが、小学校から歩いて十分ほどの川沿いにある直売所の『きてら』である。直売所のメインは、地元の採れたての野菜はもちろんだが、それよりも大きな売り場を占めているのはみかんである。そのみかんも、年間を通じて栽培されており、オレンジ、極早生温州、早生温州、樹熟温州みかん、ボンカン、デコボン、ネーブルオレンジ、清見オレンジ、八朔、三宝、甘夏、セミノール、パレンシアオレンジなど七十種類もあるというから驚きである。

南紀州のこの地は、比較的海に近い山間地で、ミカンの産地として知られる。「きてら」は一九九九年に有志が出資して発足。二〇〇六年に法人化し

て再スタートを切った。二十坪ながら、今では一億円以上も売り上げるといふすぐれた店舗なのである。その設立のいきさつを聞いたら、地域の人々の思いが詰まったものだというのがわかった。

この地域も道路が整備されて市街地との行き来が比較的しやすくなった。新しい人たちが越してきて外部からの住民も増えた。昔からの農家の人たちと外からの人たちでは生活習慣が違い、そこから行き違いもでてきたという。そこで地域の人たちが祭りや農業体験など、さまざまな催しを行い、地域のコミュニティを創ろうと活動が始まったのだという。なかでも小学校の農業体験を広げるといふ運動は、その象徴的なものだろう。

この地域は果樹地帯で、みかんのほかに梅の栽培も盛んに行われている。梅の受粉にはミツバチはかせない存在だ。梅にかざらず、ミツバチは花の受粉を助ける自然界にも農業にとつても生命をつかさどる役割をしている。

そのミツバチに苦情がくるようになったのだ。布団を干すとミツバチが糞をつけることがある。そこで、ミツバチを駆除してほしいというわけである。養蜂ができなくては、梅を始めとする果樹類の栽培ができなくなる。そこで地域の人たちが話し合った。この地域は、そもそも公民館運動が



特産のみかんと直売所「きてら」

盛んなどころだったという。

それで学校と連携し農家が学校にゲストティチャーとして子供たちに野菜づくりを教える「食育」活動を行い、地域の農業やミツバチの生態と農業の仕組みを知ってもらおうと活動を始めたのだという。この活動は、今も続けられている。

しかし活動はボランティアである。そこで、地域に経済が回る仕組みを作ろうということとなり、賛同した地域の人が出資して直売所「きてら」が誕生したというのである。こうすれば自分たちの農産物を販売し直接人々に農業の現場と作物を伝えられ、さらに経済的にもうるおうことができるというわけだ。直売所はハチミツも梅も売られるようになった。

直売所のすぐ裏手は小川が流れている。それに続くように周辺に山々が広がっている。多くは梅やみかんの栽培を手掛ける農家だ。現場が見える直売所というわけだ。山のふもととのわずかばかりの川沿いの土地に直売所はある。木造建築で、こぢんまりとした建物だ。隣には木造のトイレ、その隣に喫茶室「いこら」がある。すべてが木造で、それがそばの川の流れと、後ろに見える山、それに続く山々の景観にマッチしていて好感がもてる。この雰囲気がとてもいい。

喫茶店の「いこら」は直売所の「きてら」に出資をした田中淳夫さんの経営によるもの。この地域では、「来てね」というのを「きてら」と言う。そこで喫茶室は「行こうか」という意味の「いこら」と名付けたという。

この直売所と、そのあとにできた小学校のレストランと宿泊所が地域でつながり、地域の食をいかした、小さな町が生まれた。今度の予定を訊いたら、パン窯を作り果樹類をいかした菓子類を作りたいという。